

草の根事業育成財団平成27年度草の育成助成事業報告

高次脳機能障害者の 在宅生活実態調査

25人の事例研究報告作成事業

特定非営利活動法人VIVID

代表理事池田敦子



我々の名前 “VIVID”の由来

VIVIDはヴィヴィと読みます。
ヴィヴィ(vivi)はエスペラント語で「生きる」
を意味する世界共通語です。

VIVID

ヴィヴィ

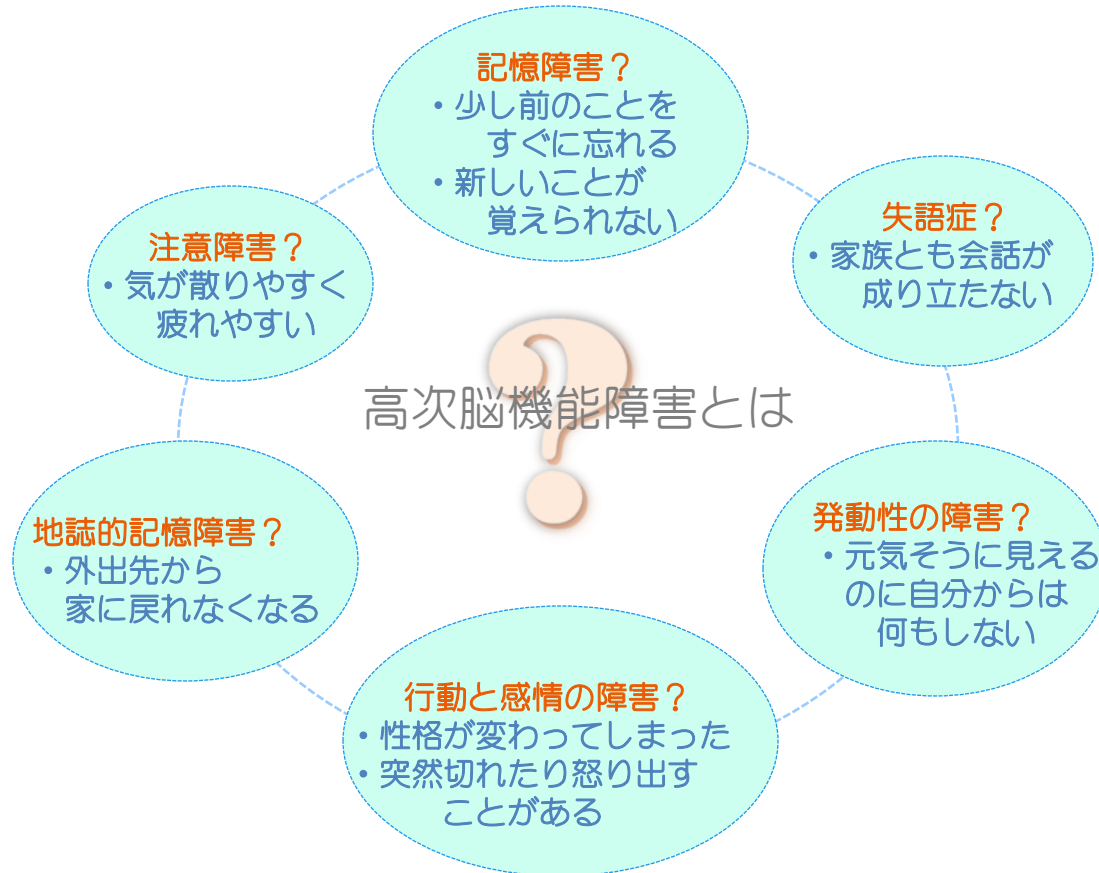


高次脳機能障害とともに

私たちは「生きる」意味を大切に考え、
高次脳機能障害があっても「生き生きとした(vivid)」生活を送
れるよう、活動していきます。

「葦」は古代から人々の生活に使われた水辺の植物です。
重い石の下からもなお、空に向かって芽を伸ばす強さを持っ
ています。

高次脳機能障害とは



ある日、突然起こった事故や病気で脳に損傷を受け、ダメージを受けた脳の部位によって引き起こされる、記憶や遂行機能障害、社会的行動障害、地誌的障害など認知機能を障害を『高次脳機能障害』といいます。誰にでも起こる可能性があり、事故や病気の苦痛だけでなく仕事や学業・日常生活等にも様々な困難が生じます。

VIVIDの活動

VIVIDは専門職の集りとして
障害があっても自分らしく暮らすための社会の仕組み作り
に取り組んでいます。

1. 調査研究

⇒高次脳機能障害者の在宅生活に関する調査・研究、在宅生活における
ケア研究会、**25人の事例研究**

2. 高次脳機能障害に関する理解の普及啓発セミナー

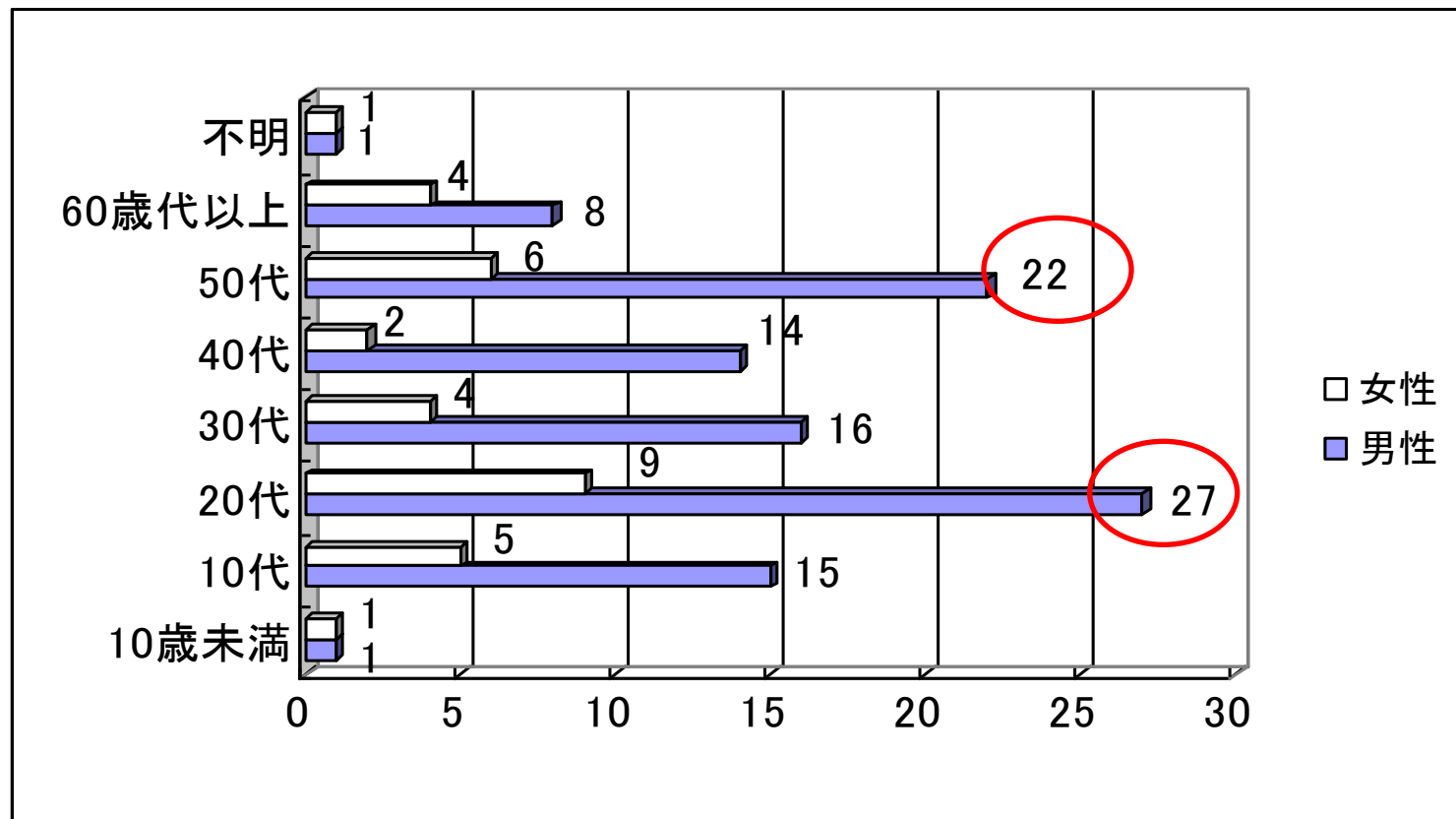
3. 高次脳機能障害者の居場所の提供

(ミニデイサービス、なんでも相談)

高次脳機能障害者の生活実態調査

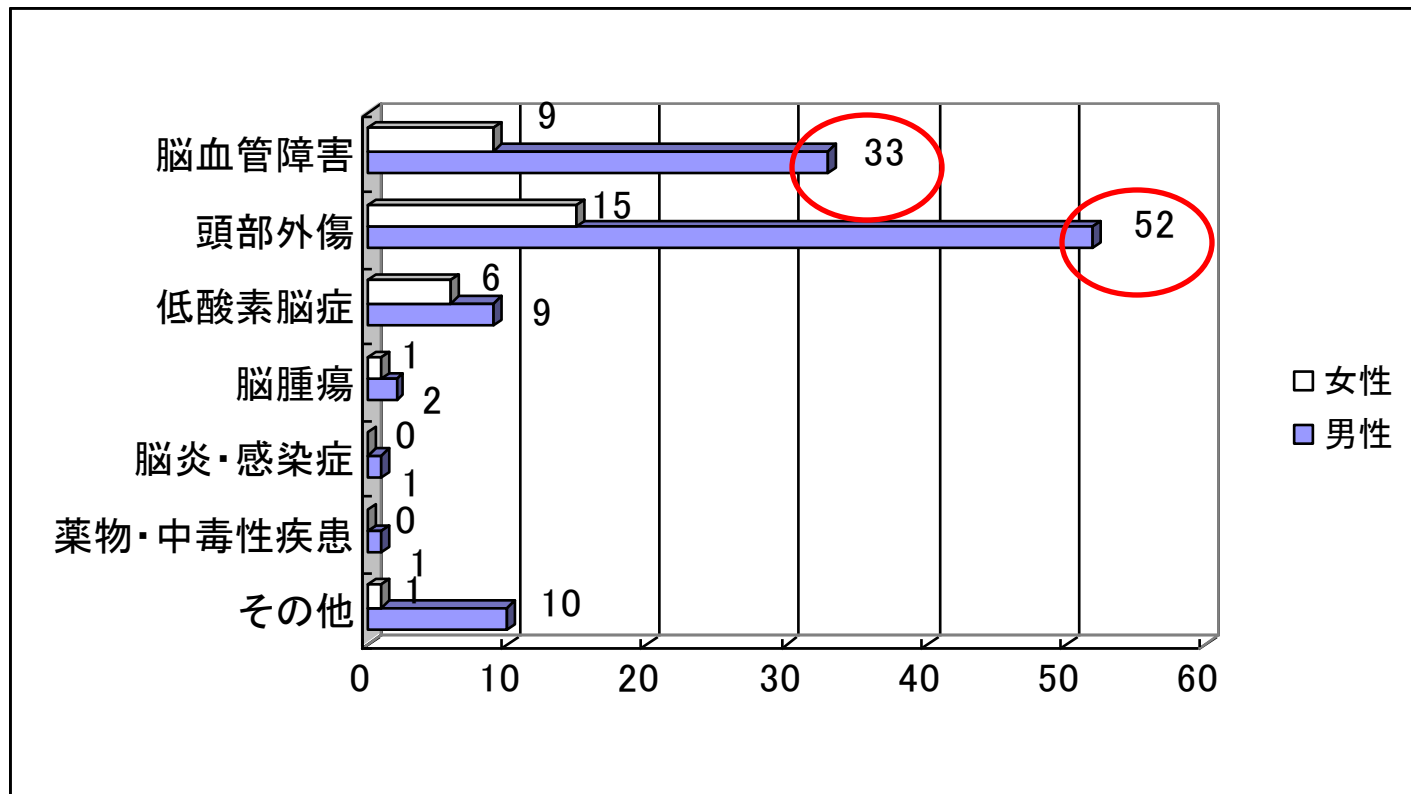
2007年8~10月、東京高次脳機能障害協議会会員
137名アンケート(男性104名、女性32名、不明1)

◆発症年齢



高次脳機能障害者の生活実態調査

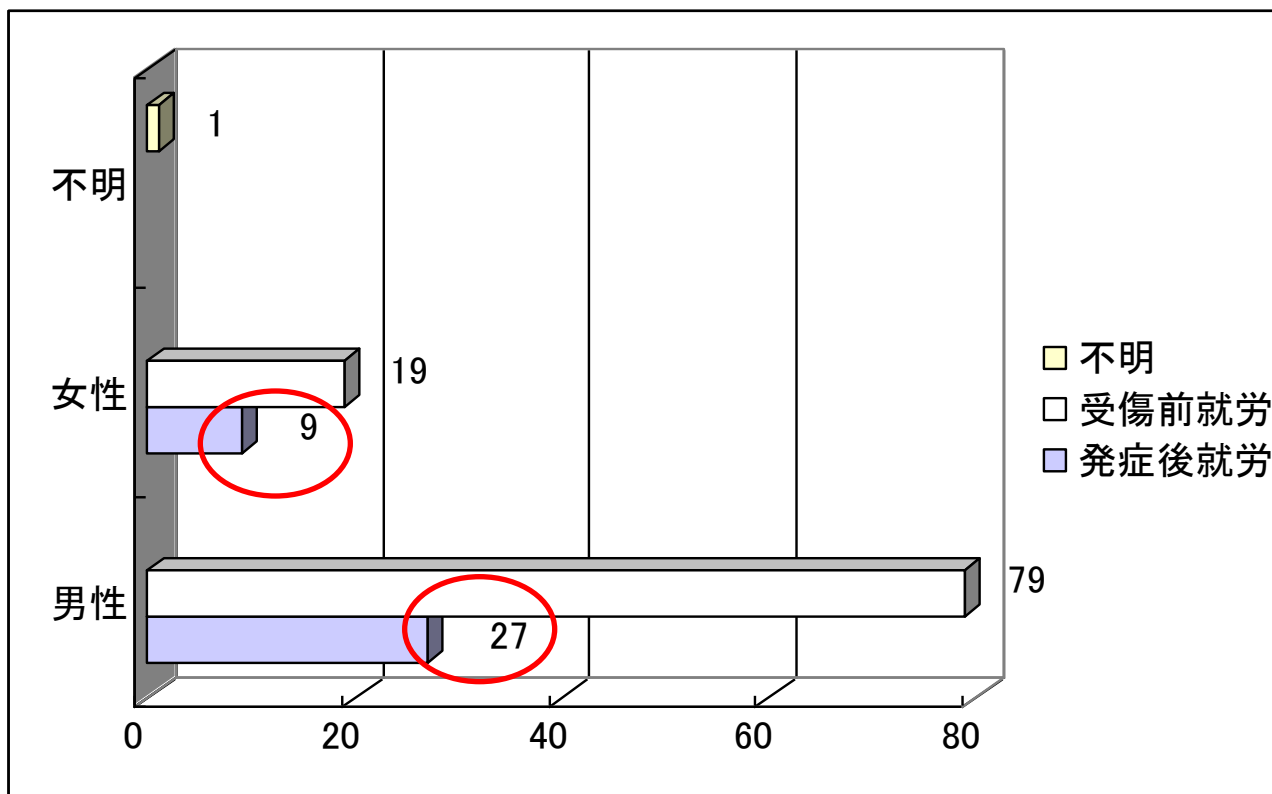
障害原因は、壮年は脳血管障害、
若者は事故による頭部外傷が多い。



高次脳機能障害者の生活実態調査

④

受傷後の再就労は困難な状態にある。



草の根助成事業で 25人の事例研究報告書を 作成しました

2007年の調査対象者137人の中の25人を
対象者として

1回目の面接調査 2008年～2009年

2回目の面接調査 2014年

2015年11月に、同じ対象者25人の6年間の
変化を記録し、まとめとしてとして報告書を作成

25人の事例研究報告書の概要

調査に取り組んだきっかけ

- ・24歳の息子が遷延性意識障害になったこと
- ・日本社会事業大学専門職大学院で専門職に出会ったこと
- ・NPO法人VIVIDを立ち上げたこと
- ・高次脳機能障害を刺さる家族会とその協議会TKK(東京高次脳機能障害協議会)に出会ったことで多くの当事者に出会ったこと

25人は
こんな人
Aさん~Yさん

25人の経過一覧			2014年現在	
	発症年齢	意識回復までの時間	受傷後経過年数	障害区分 要介護度
A	11	1月	23	2
B	16	1月	17	2
C	16	2. 5月	29	2
D	20	1月	19	6
E	21	2週	8	2
F	21	3週	20	3
G	21	意識障害	12	6
H	23	1月	17	なし
I	24	0	9	○
J	24	1月	16	なし
K	25	1月	19	3
L	28	1週	10	2
M	28	1月	14	3
N	36	0	9	なし
O	36	—	33(歿)	要介護2
P	38	1週	13	6 要介護5
Q	40	0	9	なし
R	48	1日	10	○
S	49	3週	9	なし
T	50	2日	16	6 要介護2
U	53	0	17	要介護2
V	53	1月	12	3 要介護4
W	54	2週	15	なし
X	57	0	7	なし
Y	57	一時的に意識喪失	15	要介護3

25人から見える障害の特徴

1. 回復は、数年を経てゆっくり見えてくる
2. どんなに重症でも、必ず少しずつ回復する
3. 身近な支援者（家族や、専門職）の力があるかないかで、回復の速さが違ってくる
4. 回復は、受傷前の自分に戻るのではなく、受傷後の新しい自分を発見し育てること
5. できないことはを嘆かず、できること、代替手段、外の手、等環境整備で出来るようにする

あきらめない支援のための 報告書の活用

- 助成事業で作成した250冊は即品切れ
- 一人の事例は、真実の詰まった記録
- 困ったとき、メゲそうな時、自分の価値を見失ったとき、25人の事例をひも解こう
- あきなめない本人、あきらめない家族、支援者、あきらめない社会が一人の生活をさえる
- 地域の支援のネットワークを広げよう